



Enterprise Architect 6.0 feature guide

---

*by SparxSystems Japan*

**Enterprise Architect6.0 機能ガイド**

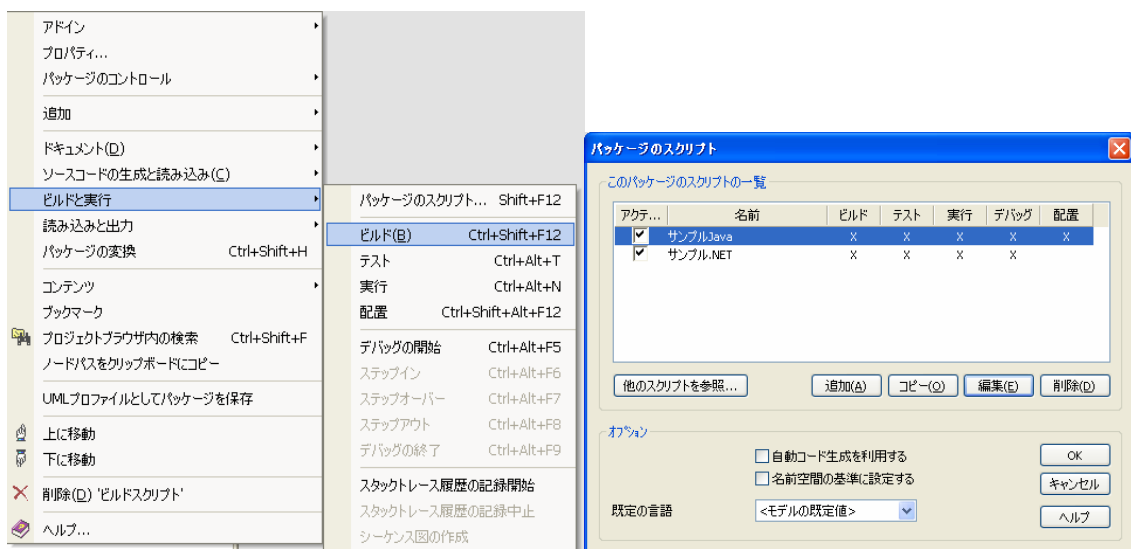


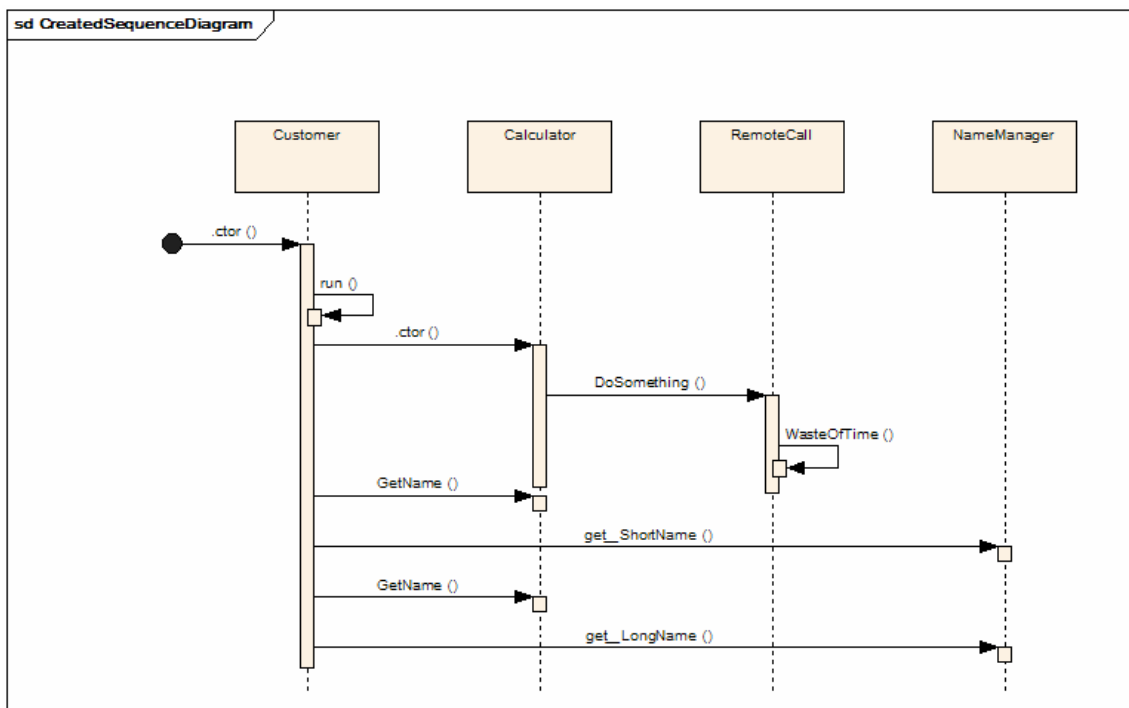
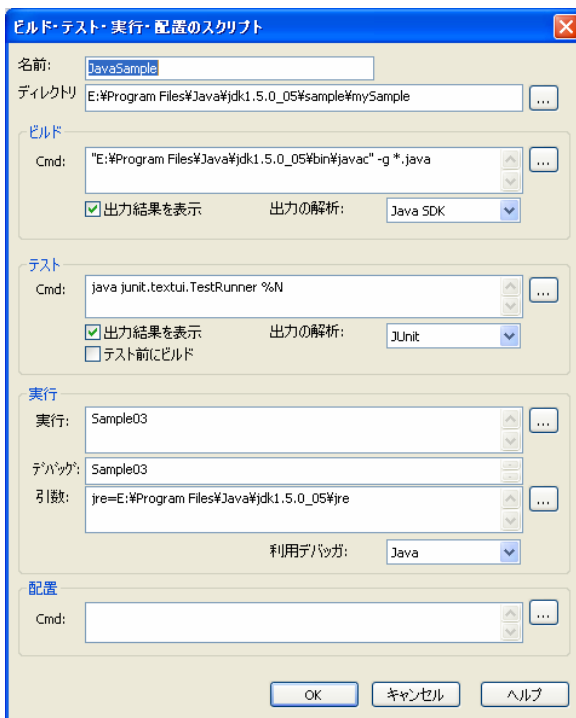
このドキュメントでは、Enterprise Architect6.0 で追加・改善される機能についてご紹介いたします。なお、青文字はその機能を利用するための操作方法です。

## ビルドスクリプトの定義と実行・デバッグ

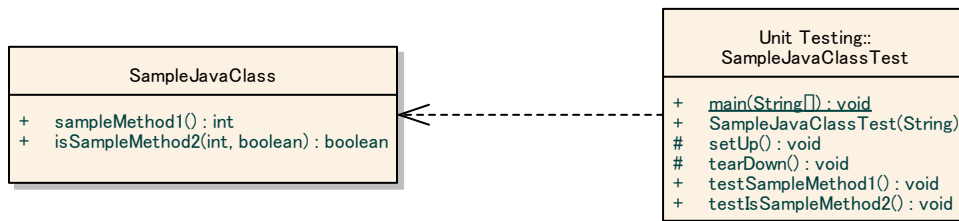
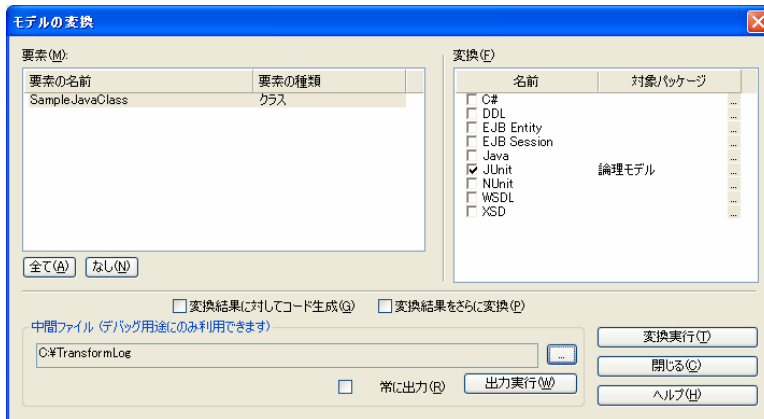
パッケージに対して、「ビルド」「実行」「デバッグ」「テスト」「配置」を実行するためのスクリプト(コマンド)を定義し、Enterprise Architect から直接呼び出すことが可能になりました。

また、Java(JDK5.0)および.NET(1.x)については、デバッグ中に「記録」することにより、記録した範囲のシーケンス図を生成することもできます。このシーケンス図の作成については、別途ドキュメントを準備する予定です。





テストは、JUnit および NUnit に対応しています。これらのテストツールのためのテストクラスを簡単に作成するために、MDA 変換テンプレートとして JUnit 変換および NUnit 変換が準備されています。既存のクラスに対して変換を実行することで、テストクラス(のスケルトンクラス)を簡単に作成することができます。



## WSDL の生成と読み込み

既存の WSDL ファイルを読み込んでクラス図を生成したり、クラス図から WSDL ファイルを生成したりすることができます。また、WSDL のモデリングのために「WSDL」グループがツールボックスに追加されました。

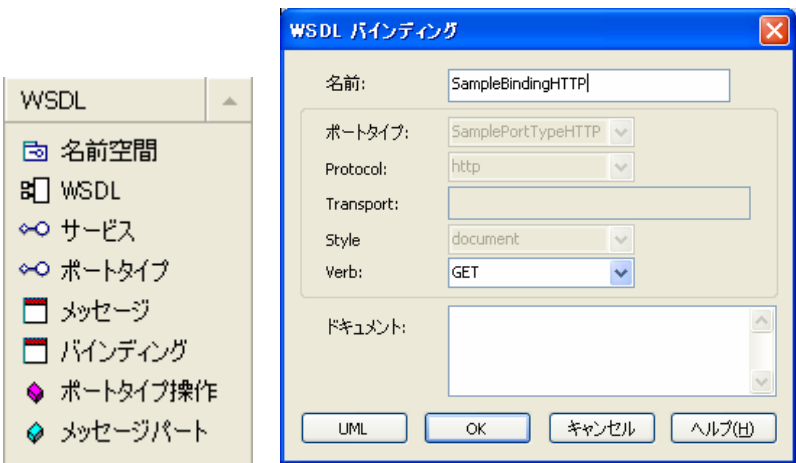
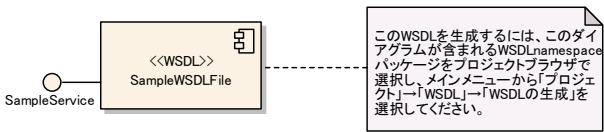
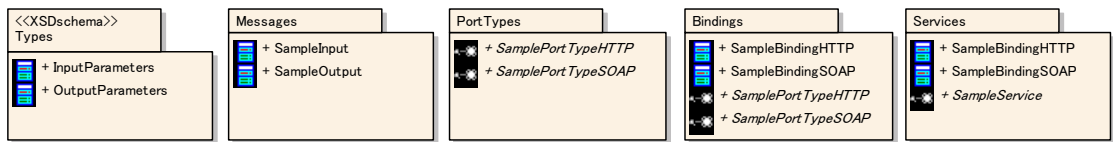
(読み込みは **メインメニュー** : 「プロジェクト」 → 「WSDL」 → 「WSDL の読み込み」)

WSDL のモデリングでは、下記のような既定のパッケージで構成されるパッケージ群を活用します。このパッケージは、ツールボックスから「名前空間」をドロップすると自動的に作成されます。

また、WSDL のそれぞれの要素は、独自のプロパティダイアログを持っています。要素をダブルクリックすると要素の種類に応じたプロパティダイアログが表示されます。

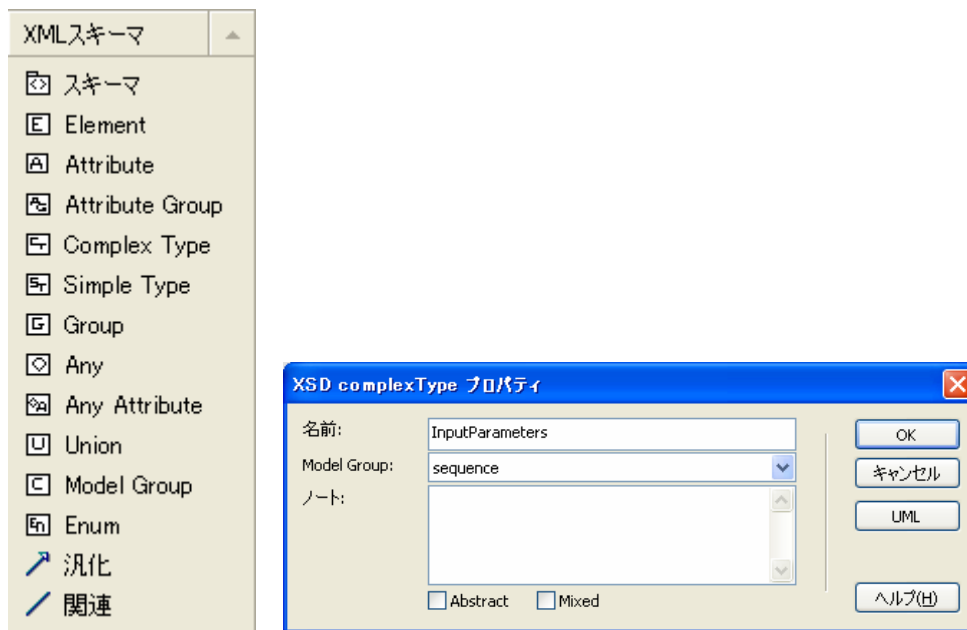
TODO: このパッケージに、独自の型やメッセージ・ポートタイプ・バインディング・サービスを追加してください。追加する場合にはツールボックスのWSDLグループを利用します。下のそれぞれのパッケージをダブルクリックすると、内容が表示されます。

このパッケージからWSDLのXMLファイルを自動的に生成することができます。このダイアグラムにツールボックスから「WSDL」というコンポーネント要素を配置することで、ドキュメントを複数作成することができます。



XMLスキーマの読み込みと生成

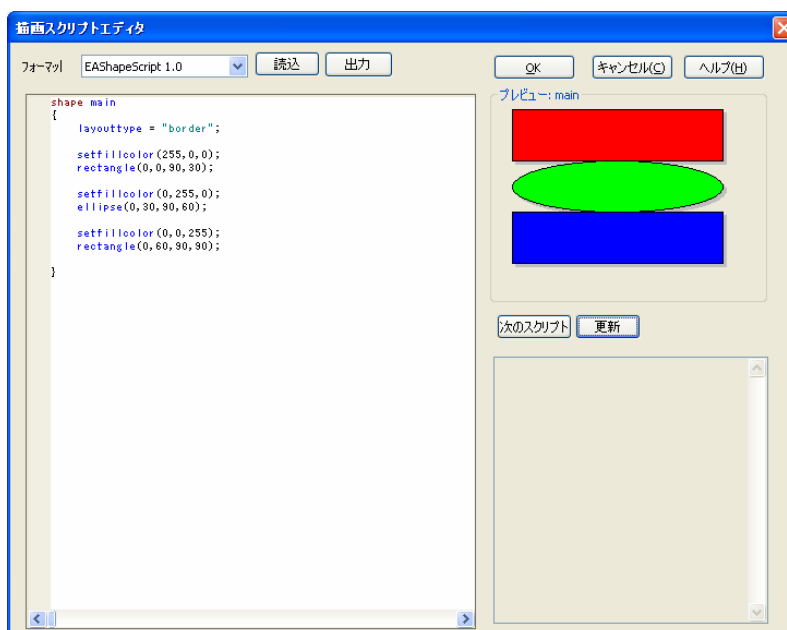
XMLスキーマの生成は過去の Enterprise Architect でも可能でしたが、既存のXMLスキーマの読み込みにも対応しました(メインメニュー:「プロジェクト」→「XMLスキーマ」→「XMLスキーマの読み込み」)。また、XMLスキーマの生成のための「XMLスキーマ」グループがツールボックスに追加されました。XMLスキーマツールボックス内の個々の要素には、専用のプロパティダイアログが対応し、より効率的にモデリングができるようになりました。



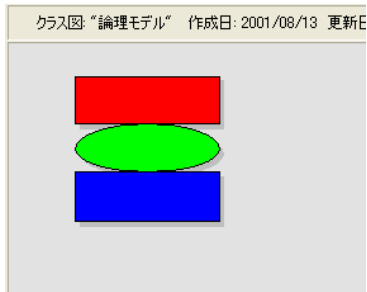
## 描画スクリプト

要素のステレオタイプに対して、自由な外見をスクリプト形式で定義できるようになりました。また、この外見を定義するためのエディタが装備されました。

(メインメニュー: 「設定」 → 「UML」 → 「ステレオタイプ」 → 対象のステレオタイプを選択 → 左中央「描画スクリプト」ラジオボタン → 「割当」ボタン)

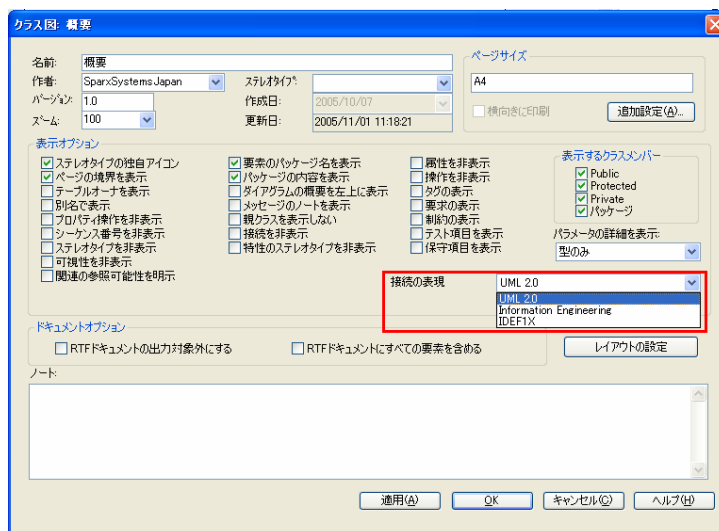


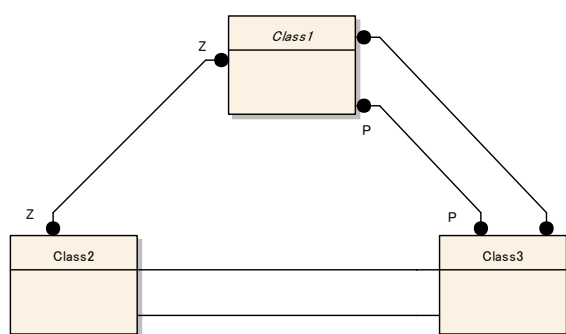
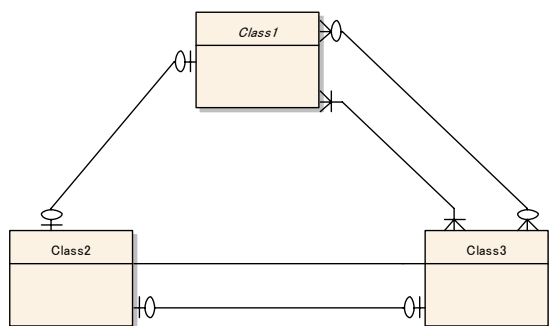
このエディタで定義した外見は、ステレオタイプと関連付けられます。要素にステレオタイプを指定することで、ダイアグラム内において指定した外見で表示されます。



## ER 図形式での表示

クラス図での接続の表現を、ER 図(IDEF1X および Information Engineering(IE))の形式で表現できるようになりました。それぞれの端点の表現は、多重度によって自動的に設定されます。





## プロジェクトの掲示板

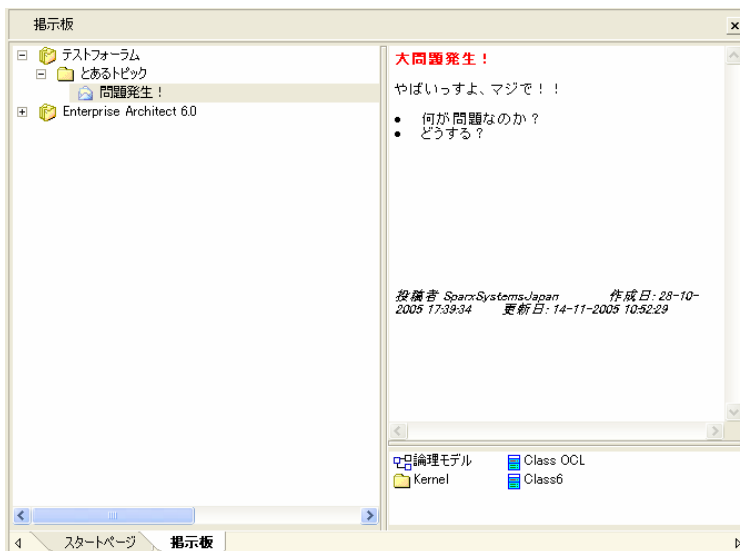
Enterprise Architect で、プロジェクトに関連する掲示板を利用できるようになりました。この掲示板はタブの 1 つとして表示され、プロジェクトに関連する話題について議論することができます。

(メインメニュー:「表示」→「プロジェクトの掲示板」)

Enterprise Architect ならではの機能として、投稿や返信に、関連する Enterprise Architect の要素やダイアグラムを結びつけることができます。この要素やダイアグラムからは、プロパティを表示したり、要素が使われているダイアグラム(ダイアグラムの場合にはダイアグラム自身)を表示したりすることができます。

(プロジェクトブラウザから該当の要素やダイアグラムを掲示板ビューの右下の枠にドロップ)





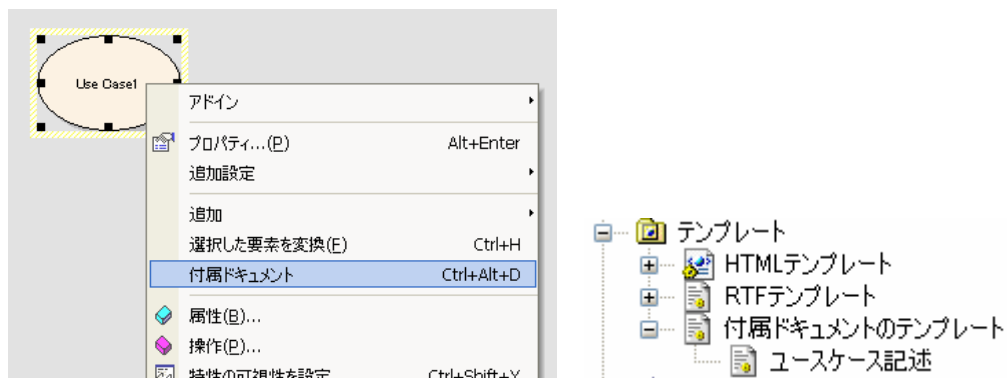
この掲示板は、同じプロジェクトファイル内に格納するだけでなく、別のプロジェクトファイル(リポジトリ)に存在する掲示板の内容を表示することもできます。複数のプロジェクトファイルに分けて開発を進めている場合にも、共通の掲示板を参照することができます。(掲示板左側のツリーで右クリック→「掲示板の接続先」)

#### 付属ドキュメント(コーポレート版のみ)・ドキュメント要素

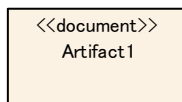
Enterprise Architect のそれぞれの要素に対して、RTF(リッチテキスト形式)のドキュメントを保持することができるようになりました。

具体的な利用方法としては、例えばユースケース要素に関連付けた「ユースケース記述(シナリオ)」が挙げられます。ユースケース記述のための「テンプレート」をあらかじめ定義しておくことで、それぞれのユースケースのユースケース記述を簡単に記入することができます。記入した内容は、EA5.0 で強化された RTF ドキュメント出力機能を利用することで、RTF ドキュメントとして生成可能です。

この「付属ドキュメント」機能は、コーポレート版あるいはフローティングコーポレート版でのみ利用できます。



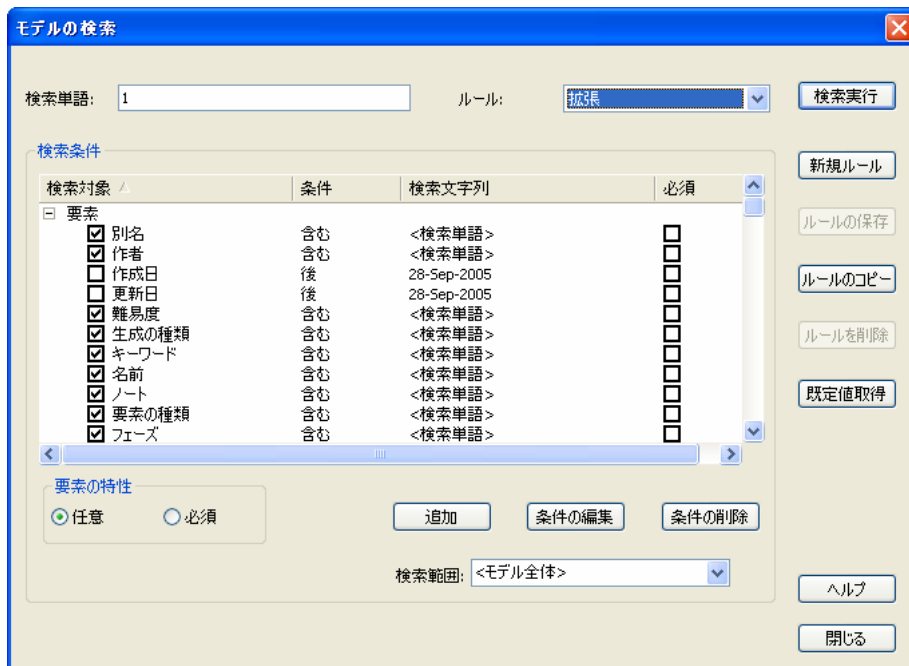
また、RTF ドキュメントを示すための「ドキュメント」要素が新たに追加されました。(ツールボックスの「コンポーネント」グループおよび「配置」グループ)



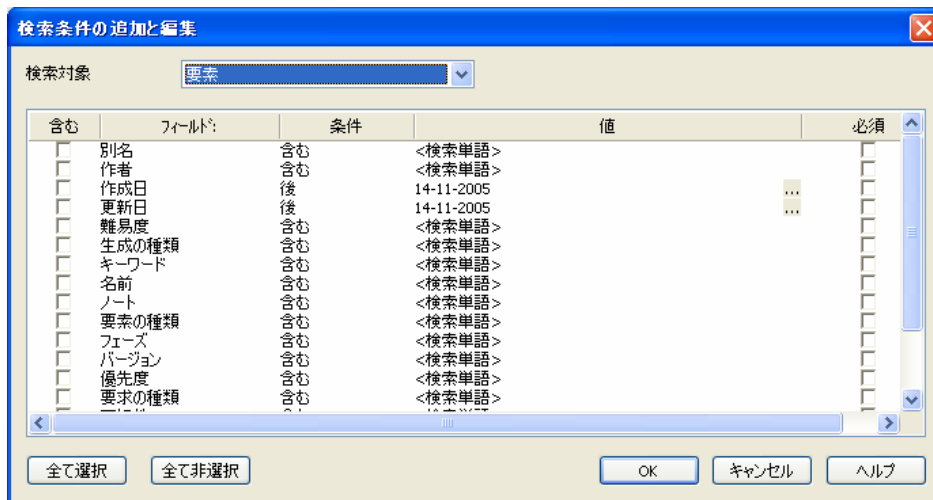
このドキュメント要素をダブルクリックすると、Enterprise Architect の RTF エディタが表示され、内容の確認と編集を行うことができます。

## 検索

Enterprise Architect6.0 では、検索機能が大幅に強化されました。さまざまな条件で検索が可能になり、さらにその条件に名前をつけて保存できるようになりました。  
(メインメニュー:「編集」→「検索」→「追加設定」)



具体的に条件を指定する場合には、次のようなダイアログで必要な条件を指定します。



このようにして作成した条件は保管しておき、自由に活用することができます。検索結果は、レポートビュー(一覧形式)で、タブの1つとして表示されます。

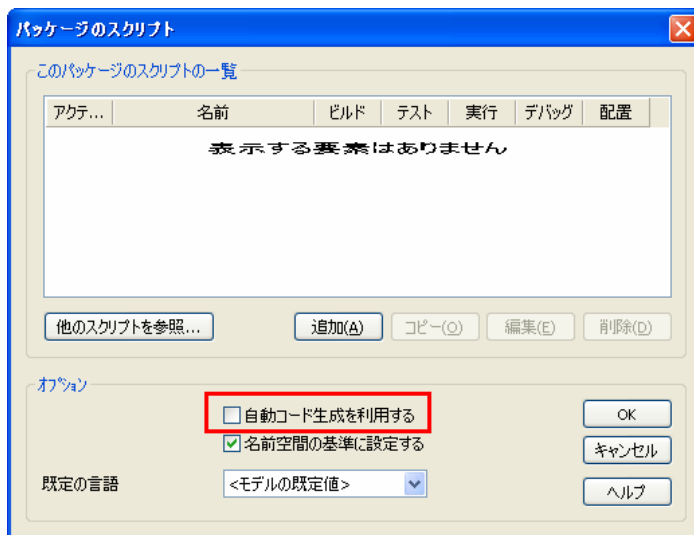
(メインメニュー:「表示」→「レポート・検索ビュー」→左上「検索ビュー」ラジオボタン)

## 自動コード生成

パッケージ単位で、「自動コード生成」機能を利用することができます。この機能を利用している場合には、モデル内のクラスの操作や属性などを追加したり編集したりした場合

に、自動的にソースコードにも反映されます。これにより、モデルの内容が確実にソースコードに反映されることとなります。

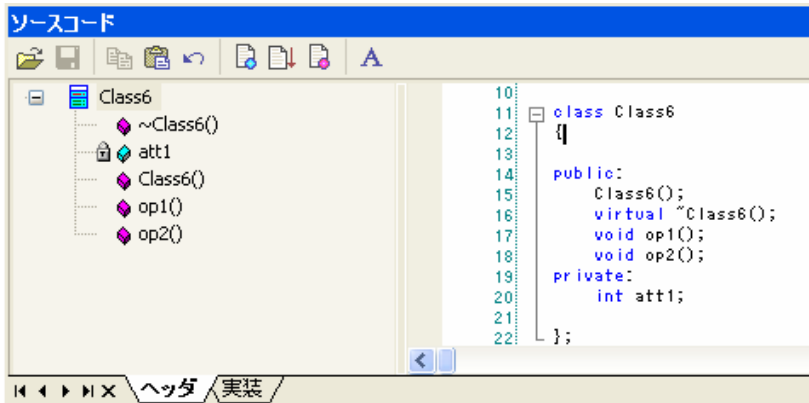
(プロジェクトブラウザ：対象のパッケージ右クリック→「ビルドと実行」→「パッケージのスクリプト」→「自動コード生成を利用する」チェックボックス)



また、ソースコードサブウィンドウも強化され、ソースコードの内容を解析して、クラスの情報ツリーを表示できるようになりました。これにより、属性や操作に関連するソースコードの位置を簡単に表示できます。

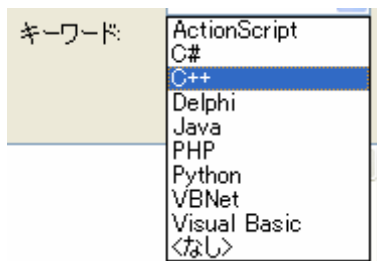
(メインメニュー：「表示」→「ソースコード」。「ファイル」→「ソースファイルを開く」を実行すると、タブとしてソースファイル・XML ファイルを開けます。)

(ソースコードの解析については、ローカルオプションダイアログ：「コードの編集」グループ→「特性ツリーを表示」でツリーの表示の有無を決められます。また、「これより大きいファイルは解析しない」の選択で、大きなソースファイルの解析を回避しパフォーマンスをあげることができます。)



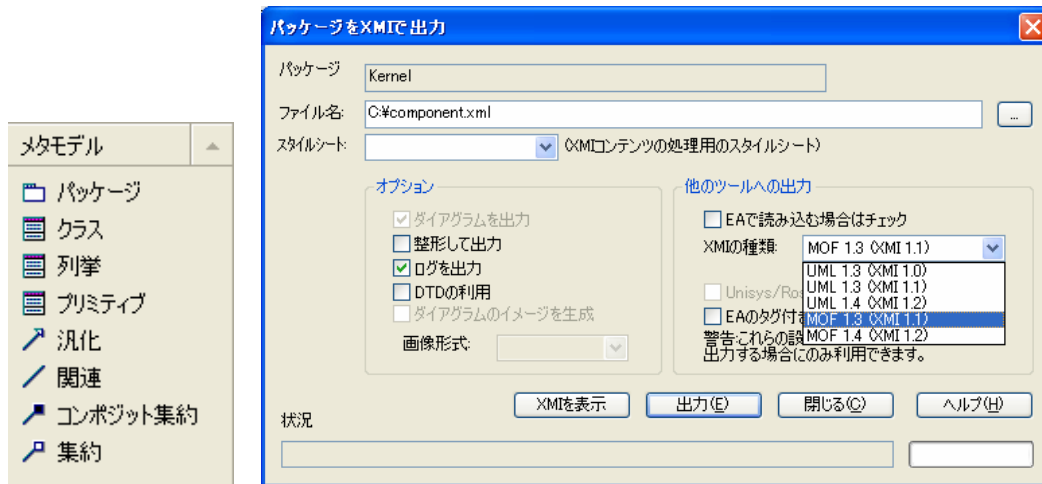
### 対応言語の拡大

Enterprise Architect の既定値として、ActionScript および Python に対応しました。また、追加の無料アドインをインストールすることで、BPMN および SysML にも対応予定です。



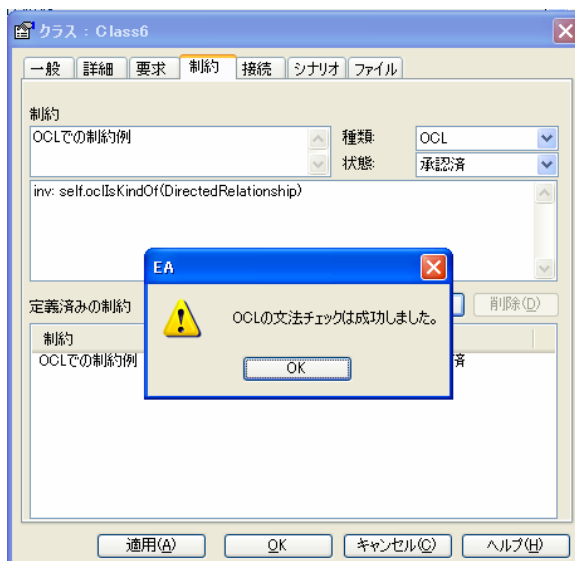
### メタモデルのモデリングと出力

Enterprise Architect で、既存のメタモデルの読み込みおよび出力が可能になりました。また、メタモデルのモデリングを効率的に行うことができるように、ツールボックスに「メタモデル」グループが追加されました。



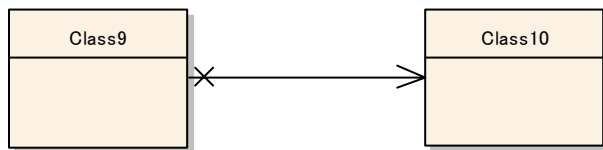
## OCL の文法チェック

要素や属性・操作などに定義した OCL の文法が適切かどうか、自動的にチェックされます。制約の種類として「OCL」を選択してください。



## UML2.0 の表現への対応

いくつかの UML2.0 の表現に対応しました。また、要素などの用語を、広く使われている言葉に置換しました。



(ダイアグラムのプロパティ:「関連の参照可能性を明示」)

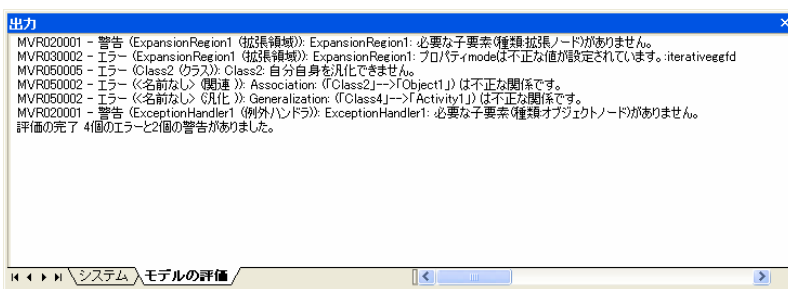
名前を変更した主な単語は次の通りです。カッコ内は Enterprise Architect5.0 の用語です。

デシジョン/マージ(分岐)・アセンブリコネクタ(結合インターフェース)・コネクタ(接続)・委譲コネクタ(委譲)・複合フラグメント(フラグメント)・状態不変式/継続(状態/継続)・コンポジット状態(サブ状態)・選択点(選択)・連結点(連結)・入場点(エントリポイント)・退場点(イグジットポイント)・例外ハンドラ(例外)・例外フロー(割込フロー)・相互作用ユース(相互作用オカレンス)・コントロールフロー(制御フロー)・実行オカレンス(活性区間)

## モデルの評価

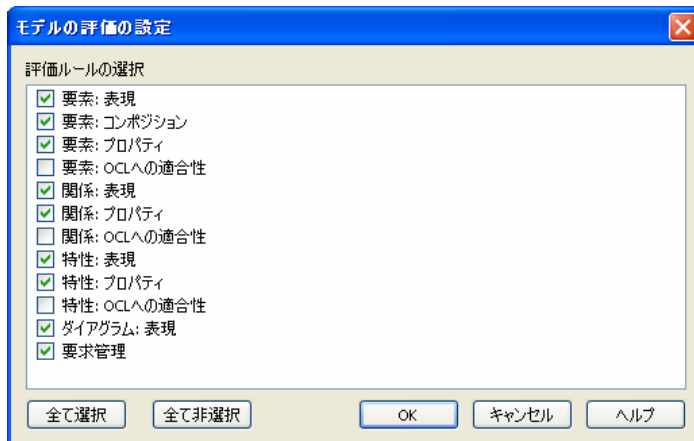
作成したモデルが UML2.0 の表現に準拠しているかどうかについて、評価を行うことができます。

(メインメニュー:「プロジェクト」→「モデルの評価」→「選択された項目を評価」)



この評価のルールは、いくつかのルールが既定値で準備されています。現時点では追加することはできません。将来的には、読み込んだメタモデルに準拠しているかどうかのチェックが可能になる予定です。

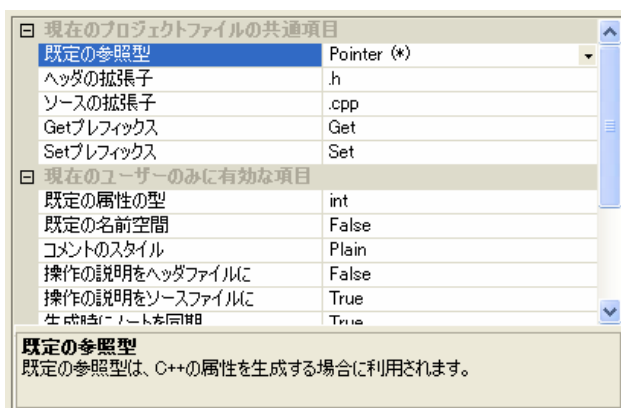
(メインメニュー:「プロジェクト」→「モデルの評価」→「設定」)



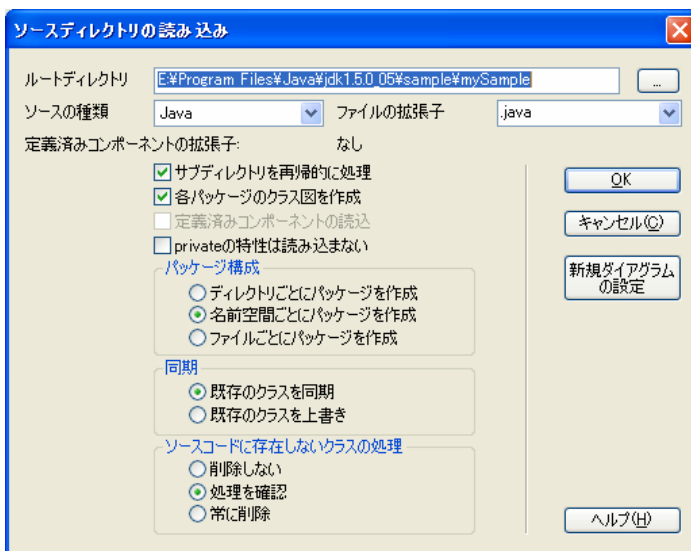
### そのほかの細かい機能強化

- バージョン管理ツールとして **Subversion** が利用可能になりました。
- リポジトリとして、**Progress OpenEdge** が利用可能になりました。
- ツールボックスの設定やレイアウトなどを「設計カテゴリ」として保存し、共通の設定として活用できるようになりました。（「設計カテゴリ」は EA5.0 では「役割」と呼んでいた機能を拡張したものです。）  
 (メインメニュー:「表示」→「設計カテゴリの編集」)
- バージョン管理ツールに接続できない場合でも、暫定的にチェックアウトして編集できる「オフラインチェックアウト」機能が追加されました。  
 (メインメニュー:「プロジェクト」→「バージョン管理」→「オフラインで作業をする」)
- それぞれの要素の上にマウスカーソルを配置すると、要素の種類やノートがツールチップとして表示されるようになりました。
- いくつかの目的別に便利なグループをツールボックスに追加しました。  
 (要求・保守・画面設計)
- ローカルオプションダイアログで、それぞれのプログラム言語毎の設定画面を改善しました。





- ・ ソースディレクトリの読み込み時に、`private` の特性を読み込まないオプションを追加しました。



- ・ 属性や操作が既定値でアルファベット順に自動整列するようになりました。以前と同様に自由に並べるためには、ローカルオプションダイアログの「要素」グループにある「特性をアルファベット順にソート」のチェックを外します。
- ・ 属性や操作をステレオタイプごとにわけて表示できるようになりました。  
(ローカルオプションダイアログ：「要素」グループ→「操作(属性)をステレオタイプでソート」)

Inventory	
Column	*pk InventoryID: VARCHAR2(10) *pk WarehouseID: VARCHAR2(10) CurrentStock: NUMBER(8) OnOrder: NUMBER(8)
FK	+ FK_Inventory_Book(VARCHAR2)
+	FK_Inventory_Book1(VARCHAR2)
PK	+ PK_InventoryID(VARCHAR2, VARCHAR2)

- ・ 操作のパラメータを、手入力できるように変更しました。以前と同様の編集画面を利用

する場合には「編集」ボタンを押してください。

- ツールボックスのグループ名「構造」をよりわかりやすい「クラス」に変更しました。
- ソースコードサブウィンドウで、C++のヘッダファイルとソースファイルを切り替えて表示することができるようになりました。  
(ソースコードサブウィンドウ:「ヘッダ」「実装」タブ)
- Enterprise Architect からクラスの「ソースコードの表示」を実行した場合に、タブとしてソースファイルを表示する機能が追加されました。  
(ローカルオプションダイアログ:「コードの編集」グループ→「外部エディタを未指定の場合は内部エディタを利用」)
- 多くのダイアログのボタンの配置やタブオーダーを改善しました。
- メニューやダイアログの表現をよりわかりやすく改善しました。
- メニューの構成を改善しました。
- 左クリックを押しながら右クリックの操作で、CTRL+右クリックと同様のメニューを表示するようになりました。
- C++・VisualBasic・VB.NET・Delphi のソースコード読み込みの結果を改善しました。
- オートメーションインターフェースに、チェックイン・チェックアウトに関するメソッドが追加されました。
- プロジェクトブラウザのダイアグラムのアイコンを、ダイアグラムの種類ごとに変更しました。
- 属性や要素のプロパティダイアログで、「コピー」のボタンを追加しました。